

## 〔講演要旨〕 「びやく」の言語学的調査の紹介

相原 延光\* (関東学院中高等学校/県立神奈川総合高校)・井上 公夫(砂防フロンティア整備推進機構)

### §1. はじめに

『地名の研究』(柳田國男, 1936, 講談社学術文庫, 2015)の解説で, 中沢新一は「表に立って表現されてはいないが(中略), 分類された地名が層序的秩序をつくっているという直感をいたるところで感じる」と評している。柳田自身, 「歴史学は文字に書かれた記録だけから過去に関する情報を取り出そうとする学問である」と批判しており, これが彼の高い研究ポテンシャルであった。演者らは, 考古遺跡から得られた新知見や日本語の漢字研究の成果を取り入れることで, 柳田が懸念する「ことばの漢字への宛字作業」も一定の理解を持って進めることができると考え報告する。

### §2. 葉山町の小地名「ビヤクバ」「ビヤク田」

葉山御用邸に流れ出る下山川は, 三浦半島の最短距離を貫く小河川で, 古東海道(ヤマトから相模を抜けて東京湾を渡り, 上総から下総へたどるルート)に位置する 771 年(宝亀二年)以前の古い官道の重要地点と考えられている。また, 縄文人が多数住んでいたことが遺跡から知られ, 弥生時代には塩田への流通路としての三崎道に通じている。4 世紀後半に築かれた長柄桜山古墳群: 大型前方後円墳(平成 14 年国指定)があり, 5~6 世紀に下山川の下流域では三ヶ岡遺跡でムラが形成されていた。

周辺地域は三浦半島活断層群(衣笠・北武断層)があり, 多数の小地名が発見された。「ビヤクバ」とその移動体で川の屈曲地名「川向<sup>かわむかう</sup>」や「ビヤク田」。棚田と野菜畑の広がるのどかな里山の風景と, 「大崩(昔「びやくがくむ」ともいった)」、「崩<sup>おおくずれ</sup>」、「蛇場見<sup>へびばみ</sup>」、「鍋壊<sup>なべこわし</sup>」などである。(葉山郷土史研究会 2009, 郷土誌葉山第6号)

### §3. 江の島の「びやくがくむ」の伝承

昭和 36 年(1961)6 月 28 日の梅雨前線豪雨により「延命寺」の裏山が崩潰し, 山道沿いの墓地から多数の人骨が流れだした。現在は津波避難路になっており, 災害の記憶が既に消えている。この災害から 3 年後にも寺の南方の崖が崩潰し, 土石流被害があった。当時災害を体験した老女(明治 38 年生)は幼少時に母親から逸話とともに「びやくがくんだ」ということを教わった, と島の住民は伝え聞いている。

### §4. 言語学的調査と歴史学調査

(1)言語学的調査 「びやく」を漢語辞典で引くと, 「突然開いて横に広げる」とか「裂ける様子」を示す漢字

「關」が見つかる。字義は「ひらく」「のぞく」「さける(裂)」で, 「呉音」では「びやく」, 「漢音」では「へき」。発音は「入声」なので, アルファベットで表記すると「byak」(日本人には「k」は声にならない)。中華台北の発音が近い。日本語では「byak-u」となる。「bya」は「jya」に変化して漢字の「蛇」に転化され, 後に蛇や龍神信仰に組み込まれて広がった可能性がある。

そこで「關」を形声文字としてみると, 「門」と「辟<sup>びやく</sup>」。中国では「門」に「生まれ出る所」「陰部」という意味が生じている(笹原宏之, 2014)。音符の「辟」の部首は「しかばね」を意味し, 不完全な人間の象形で, つくり「辛(鍼<sup>はり</sup>)」は傷口を意味する。すなわち, 字義は「鍼を挿して一気に引き裂くような(痛みを伴う)現象」。

日本語「びやくがくむ」は呉音「びやく(關)=裂ける」が骨格となって, くむ(崩む)という訓読みがされ, 最後に助詞「が」加わったと解釈される。

(2)歴史学的調査 漢字を伝えたのは 4 世紀末の応神天皇の御世に百済より渡来してきた王仁で, 「論語」「千字文」にある「日本書紀」「古事記」に記されている。一方, 国内で初めて製作された漢字文は千葉県の市原市の稲荷台古墳から出土した「鉄剣」や和歌山県橋本市の隅田八幡神社の銅鏡などに発見されている。倭の歴代の王は南朝の諸王朝に遣使し, 朝貢し, 倭国王としての地位の確認を求め, 同時に多くの造形文化や漢字・漢文の摂取に努めた。公用語は「呉音」の漢字であり, 5 世紀後半までには日本人は漢字を受容し, 使用していたと考えられている。

### §5. まとめ—「びやく」の層序学的位置—

#### (1) 呉音を話す渡来人の築き上げた文化

応神天皇 14 年(283)に百済から弓月王が 18,670 余人を率いて北部九州の福岡志賀島一帯から入って全国に移住した(日本書紀)。海人族安曇(秦氏)や「徐福」伝説が残っている。弥生の渡来人は日本に新しい土器文化を築き上げた。

#### (2) 自然と人との接点としての小地名「びやく(關)」

さらに 4 世紀に大和朝廷が九州を制圧したとき, 朝廷の水軍として活躍し「海部」と呼ばれた渡来人があった(関裕二, 2015)。彼らは, 歴史の表舞台に立たず, 古墳建造などで王政を支えた。呉音を使用し, 「開く神」という自然信仰をもつ彼らが畏敬の念をもって崩潰地名として「關」と名付け, 後世へ伝えたのではないだろうか。